



Title	村上春樹文学における物語の研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	肖, 禾子
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15582号
Issue Date	2023-06-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90240
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Xiao_Hezi_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 肖 禾 子

主査 教授 中 村 三 春
審査委員 副査 教授 押 野 武 志
副査 教授 権 錫 永

学位論文題名

村上春樹文学における物語の研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

村上春樹の小説は、英語を中心として世界の主要言語に翻訳され、広く人気を博しており、現代日本を代表する世界的な文学であることは論を待たない。研究・批評も数多く発表され、特に主力をなす長編小説群については、精神分析や深層心理学と親近性を有する理論によって、物語が人の心を癒すとする救済の方向で読解されることが一定の通説となっている。それに対して本論文は、その二部構成による論述の第一部において、村上の小説における物語が物語それ自体を作り出すメカニズムそのものとして呈示されていることに着目し、これを契機として、従来の紋切型に陥った理解の手法に対して根底から再検討を企てた。すなわち、主要な長編小説として『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、『ねじまき鳥クロニクル』、『海辺のカフカ』、『1Q84』、『騎士団長殺し』の五作品を取り上げ、先行研究を批判的に受け継ぎつつ、分析美学や脱構築、さらにはナラトロジーなどに依拠して新たな物語生成の理論を構築し、それによって村上小説の物語の構造を改めて分析し直した。その結果として、従来の説のような救済の要素とともに、自己相対化や否定的な側面の同居することを明らかにした。また、その論述の過程において、物語が自らを生み出す自己生成のプロセスを描き込まれたものとして、一種のメタフィクション（物語についての物語）の局面を重視し、精緻に分析した。これにより、従来の村上研究にはない、高い理論水準における物語の追究を実現した。

また、本論文の第二部においては、翻訳・音楽・様式の各面から、村上作品の物語が、多様な起源と結びつき、接続されてあることによって個性的となっていることを改めて検証した。すなわち、アメリカ文学の翻訳者としても知られる村上の訳業のうち、フィッツジェラルドの代表作『グレート・ギャツビー』の村上訳を取り上げ、これに詳細な検討を加えた。その結果として、その翻訳としての特徴、および村上自身の文体への影響を解明し、ひいては近代日本における翻訳と文芸創作との関わりにまで論及した。また、村上作品に多数散見する西洋音楽への言及を網羅的に整理し直し、特にビートルズとワーグナーに着目してその効果を実証した。これらの翻訳論や音楽論についても、先行研究において触れられてきたことであるが、本論文ではそれを実際に原典のテキストを参照して綿密に検証し、また原典の作家の問題にも踏み込むなど、比較文学の手続きを適切に踏まえて実践している。さらに、村上文芸の様式として「グロテスク」の要素を初めて指摘し、それが物語において自己を他者化し、物語を両義的なものとすることを論じて、第一部の問題を改めて補強してまとめた。

これらのことが一定の説得力を伴って詳細に追究されていることから、本論文は村上春樹文学研究の領域において、高い研究成果を上げたものと認められる。

・学位授与に関する委員会の所見

このように本論文は、まず先行研究の紋切型を批判的に整理し、新たに物語の理論を研究方法として導入したこと自体において評価できる。また、主要な長編小説を対象として、物語の自己生成と、物語内容の自己相対化および両義的な効果の面から一貫して論じており、それを契機として幾つもの新解釈を呈示した点についても、成果を上げたものとして認められる。さらに、翻訳や音楽および「グロテスク」様式との繋がりについても、整合性をもって物語の問題と結びつけており、村上研究における新たな視点として理解される。これらのことから、本審査委員会は、本論文を高い研究水準にあるものとして判断した。本論文によって、村上文学の研究における物語の分野において、理論的により高次元の認識が行われたと言えるだろう。

ただし、意欲的な研究だけに、幾つかの問題点も審査において指摘された。すなわち、(1) 物語の自己生成や、自律的に運動する物語機械などの術語が観念的・思弁的に過ぎるくらいが見受けられる点、(2) その結果として物語を特権化し、あるいは呪物化して物語以外の多様な要素が捨象されているようにも見られる点、(3) 翻訳や音楽との繋がりについて、フィッツジェラルドやビートルズ、ワーグナーら以外の作家・作品への目配りが不足している点などである。しかし、これらの諸点はいずれも本論文の意欲的な研究姿勢と表裏をなすさらに高度な問いであり、本論文全体の達成度を損なうものではない。それらは申請者が今後も引き続き村上文学に関する研究を持続し、研究理論についてもさらに洗練することにより転回させ、解決の期待できる課題であると言える。

本審査委員会は、以上のような審査結果に基づき、全員一致により、本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと判断した。